



学習者の日常と古典の世界との接点を見つける古典
の指導：

「おくのほそ道」の書き換え学習で「たねがしま道」
を書く

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮内, 征人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/0002000148

学習者の日常と古典の世界との接点を見つける古典の指導

―「おくのほそ道」の書き換え学習で「たねがしま道」を書く―

宮内 征人

一 日常と古典の世界との接点を見つける古典の指導

論者はこれまで、郷土と関連する古典の指導を行い、それらをまとめてきた。

- ① 「古典に親しみ、伝え合う力を高める授業の創造―郷土のよさを生かした古典の指導を通して―」（二〇〇一年）
- ② 「北播磨の時代的・文化的背景と関連付ける古典の指導―『平家物語』『三草合戦』の場面を読む―」（二〇一二年）
- ③ 「郷土や地域に着目した古典の指導―『島津いろは歌』を例に―」（二〇一七年）

①は、当時勤務校のあった屋久島をモチーフに、「現代風枕草子」を書く実践について論じた。「文体の模倣」を通じて古語の知識・理解に努め、古典に親しませ、郷土の理解に結び付けることが実践のねらいであった。この「パステイ・シユ」の手法は有効で、学習者は、この学習活動が印象深かったのか、学習後も生活日記に「をかし」「あはれ」「つきづきし」「おもしろし」「けり」などの古語を用いて古文調で記した。習得した内容を活用する場面が見られ、古典「枕草子」に、そして郷土屋久島に一層興味・関心が高まったことが一連の学

習により確認できた。

②は、学習者の居住地域において、源平合戦が行われたことから身近な地域の歴史や文化に関心を持たせようと、『平家物語』の「三草合戦」の場面を実践した。「三草合戦」は教科書教材では取り扱われない章段のため、発展学習として実践した。同様に、『源平盛衰記』にも同記述があることから、比べ読みを通して、二つの古典の描かれ方の違いについて考えさせた。長期休業中にはレポートを課して取り組ませた。学習者は言い伝えの残る場所をフィールドワークで確かめ、それをマップとしてまとめ、さらに写真を加えて解説するなど、深まりのある探求型の学習ができた。

③は、島津氏中興の祖、島津忠良の作である「島津いろは歌」について学習指導を行った。「島津いろは歌」四十七首は、教訓性が高く、現代の生き方にも示唆を与える和歌である。島津家のみならず、西郷隆盛や大久保利通など、下級武士までそらんじる和歌であった。学習者の感想には、「自分を磨くための手段を書いている」「誰もが経験のあることが書かれている」「人を思いやること」「時間を大切にすること」等が見られ、歌意や教訓を理解することができた。

①の「パステイ・シユ」の手法を用いた「現代風枕草子」の学習指導のねらいは、まず、「パステイ・シユ」の手法を用いた学習指導により、何よりも古語に対する抵抗感を和らげることができることにある。

次に、「バスターシーシュ」による「アウトプット」化により、理解がより強固となり、この創作活動を通して思考力・表現力を身に付けさせることが可能となった。古語を用いて生活日記を書いた学習者の例は先に述べたとおりである。身近な地域の事物に目を向けることが郷土愛につながり、「古典」と「郷土」との関連性をもたせることができたのであった。

平成二十九年版中学校学習指導要領の総則編第三章「教育課程の編成及び実施」の第六節(5)には、「知識基盤社会化やグローバル化がますます進展する中で、国際的規模の相互依存関係がより深まっている。将来の我が国を担う中学生は、郷土や国で育まれてきた優れた伝統と文化などのよさについて理解を深め、それらを育んできた我が国や郷土を愛するとともに、国際的視野に立つて、他の生活習慣や文化を尊重する態度を養うことが大切である。」と述べられており、教育活動において、郷土愛を育む学習を推進していくべきであろう。

中学校国語教科書の古典教材に『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』『枕草子』『平家物語』『おくのほそ道』(注1)が採録されている。『おくのほそ道』は、松尾芭蕉が名所旧跡を巡り、その場所を詠んだ俳句とその地域の感想を併せて記したものである。江戸・深川から奥州、北陸を経て美濃・大垣にいたるまでの約二千四〇〇キロメートル、約百五十日間の旅である。『おくのほそ道』において郷土と関連付けられた学習指導を行い、郷土や国で育まれてきた優れた伝統と文化などのよさに気付かせ、学習者の日常と古典の世界との接点を見つめる古典の指導を論じるのが本論の目的である。

二 「おくのほそ道」の教材的価値

石塚修は、「おくのほそ道」における芭蕉の旅の目的について、阿

部喜三男の論考から引用している。(注2)

- (1) 歌枕をたづねる
- (2) 自然に接する
- (3) 自然よりも人事
- (4) 古人の心を求める
- (5) 漂泊の思ひ
- (6) 俳風宣傳の意識
- (7) 新風の追求
- (8) 人生観より
- (9) 紀行文への意欲

芭蕉の旅の目的としては、「(1)歌枕をたづねる」「(4)古人の心を求める」「(5)漂泊の思ひ」等がいわれ、旅を通じて、松島や平泉、象潟など、和歌に出てくる名所旧跡を巡ることにあつた。大岡信は興味深いことを述べている。

芭蕉は『奥の細道』を代表とするように、一生涯片雲の風に乗つて歩いた人です。その理由はなにかといえ、土地の靈魂と結ばれるということにありました。そのためには、旅をしなければならぬ。靈魂というのは、死者の魂ですから、土地土地の歌枕を訪ねていく。なぜ歌枕を訪ねるかといえ、そこで土地の名前を詠み込んだ優れた歌が作られているからです。(略)優れた古人が、その土地を讃える気持ちで歌を作っているということは、すなわちその歌のなかにその土地の靈魂が移り住んでいるということです。(略)本当の意味でその靈魂と一体化するためには実際にその土地に行かなければならない。芭蕉が旅をしたのは、そういう意味で、ほとんどが優れた歌枕の土地を訪ねるためであつた。(傍線部は引用者による。以下、同様。)

中学生に靈魂の話をするのは差し障りがあるにせよ、大岡の論は、「歌枕を訪ねる」ことについての補説となりうるであらう。

中嶋真弓は、教科書教材「おくのほそ道」「旅立ち」「平泉」「立石寺」などには、どのような教材的価値が認められるか、教科書会社

の「採録のねらい」を次のように分析した。

- ◆東京書籍・青春の普遍のテーマ
- ◆学校図書・名作の概要を知らせる。
- ◆三省堂・…生き方の厳しき・真摯な態度
- ◆教育出版・人生観や自然観への開眼
- ◆光村図書・求道的な生き方

中嶋は、「おくのほそ道」について、「価値が高く、国民の教養として知っておくべき教材」として採録されていることを指摘し、「この作品を教材化することによって、中学生へ「生き方」への一提言という意味合いを持たせ、今を生きる生徒達への問題提起として」と言

えるのではないだろうか」と論じている。
そこで、中学校国語科における古典指導について、「おくのほそ道」の実践に関する先行研究を概観する。

三 「奥の細道」の実践に関する先行研究

渡辺春美は、古典教育実践の営みを史的に位置づけ、達成と課題を明らかにするための基礎研究として、『枕草子』『平家物語』『奥の細道』『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の実践論考について、整理している。ここでは備考欄は割愛した。

著者	論文題目	掲載誌	発行所	年月日
ア 麻生信子	この教材で何を考えさせるか 「おくの細道」―平泉の段	文芸教育二二	明治図書	一九七四・七
イ 安井煥英	『奥の細道』（最上川）教材の扱い方と実践授業の展開	長谷川孝士編著『中学校古典の授業―全国実践事例―』	右文書院	一九七八・八
ウ 前野昭人	奥の細道「平泉」の段の三連句（うけあい）鑑賞学習中 学三年）	遅れがちな生徒の指導 国語科	明治図書	一九七八・九
エ 長岡市立南 中学校	単元「漂泊の心」（三年）の展開	中学校国語科新単元学習の展開―その 七つの視点	教育出版	一九七九・四
オ 尾田由紀子	おくのほそ道	大平浩哉編『中学校新教育課程実践事 例集三年 国語・理解・表現・言語事項』	第一法規出版	一九八一・四
カ 柳瀬真子	特集・子どもの想像力を豊かにする読みの指導（子ども ものつまつぎ・事例と対策）豊かな想像力から豊かな 創造力へ―中学校「おくのほそ道」の句と「万葉集」の 短歌から―	実践国語研究 二一九	明治図書	一九八二・一

ニ	ナ	ト	テ	ツ	チ	タ	ソ	セ	ス	シ	サ	コ	ケ	ク	キ
五十嵐清美	鳥居千鶴子	規工川佑輔	中野徹也	小田美智子	松岡隆	杉田知之	勝山謙之	中山厚子	斉藤洋子	中村順信	平田士司	石井勝利	石川弘明	石川弘明	鈴木孝資
私の古典教室(中学三年)―『奥の細道』を読む―	おくのほそ道 デイベートによる興味の喚起	道「夏草や」(中三)	〔実践研究〕芭蕉つて、うそつきなんだ！	●効果的な朗読 芭蕉の生き方を話し合う	古典に親しむ群読指導「おくのほそ道」	教室が疑問であふれかえる古典の授業―『おくのほそ道』	古典読本の編集―古文を心で感じる―『おくの細道』(中学校三年光村―)	古典「奥の細道」に親しむ	言葉の持つ意味の豊かさに気づかせる指導	目標と見通しをもたせる課題「古典の世界」	「夏草―おくのほそ道から」の実践	「おくのほそ道」の教材研究と授業	理解領域における評価を生かした授業	『奥の細道』で「旅の心」を考えさせる―古典教材による単元学習の試み	小特集・新しい古典教育をひらく(実践報告)古典に親しむ授業―『夏草』『おくのほそ道』からの授業実践を中心として―
日本文学 四四巻	実践国語研究 二二二 一六一―一〇	月刊国語教育 一三二 二二―一六	月刊国語教育 一二三 一一―一九	新学習指導要領 中学校国語科の指導事例集第三巻 第三巻「古典」の理解と表現	実践国語研究 一〇五	月刊国語教育 一〇九 一〇―一七	実践国語研究 九九	月刊国語教育研究 一七四	中学国語 七	実践国語研究 五三	実践国語教育情報	中学国語 二	国語科学習状況の評価指導事例	月刊国語教育 一一 二―一五	月刊国語教育 九 二―一三
日本文学協会	明治図書	東京法令	東京法令	明治図書	明治図書	東京法令	明治図書	学芸	明治図書	明治図書	教育出版センター	明治図書	明治図書	東京法令	東京法令
一九九五・八	一九九二・二一	一九九二・八	一九九一・二一	一九九一・三	一九九一・二	一九九〇・九	一九九〇・六	一九八六・一一	一九八五・七	一九八五・五	一九八四・二	一九八四・一	一九八二・九	一九八二・八	一九八二・五

又	杉田知之	自らの疑問を調べて発表する「おくのほそ道」	中学校国語教育実践講座 第八巻 典に親しむ学習指導(理解) 古典	古	ニチブン	一九九七・三
ネ	西山由美子	メディアを活用した古典学習の展開	中学校国語教育実践講座 第八巻 典に親しむ学習指導(理解) 古典	古	ニチブン	一九九七・三
ノ	佐藤文宣	仮想学習体験を取り入れた「おくのほそ道」	中学校国語教育実践講座 第八巻 典に親しむ学習指導(理解) 古典	古	ニチブン	一九九七・三

渡辺は、昭和二十二年から四十四年までは実践例を見出すことができなかったとして、それ以降を三期の時期区分に分けている。本論においては、区分は渡辺の記述通りに、和暦・西暦の順とし、本論では渡辺の分析を端的にまとめた。

I 昭和四十四(一九六九)～五十一(一九七六)年

昭和四十三(一九六八)年に教育課程審議会答申が示され、翌年に学習指導要領の改訂がなされたこともあり、「指導過程に留意しながら学習者の主体的学習の成立」を目指して、「新たな古典教育の方法が模索された」時期である。第Ⅰ期は、論考ア・イ・ウが該当する。発行年月日と一致しないのは、実践時期と発行時期に時差があるためである。論考アでは、芭蕉の俳句「五月雨を集めて早し最上川」を読むためにグループ学習を取り入れ、「早し」と「涼し」を比べて考えさせた。論考イ・ウは、西郷竹彦の教材観に立ち、グループ学習による話し合い活動を通じて芭蕉の芸術観や歴史観に迫る実践で、学習に遅れがちな学習者の配慮も行っている。

II 昭和五十二(一九七七)～六十三(一九八八)年

昭和五十二年度版学習指導要領では、「言語能力の育成」が重視された。主体性と創造性に価値が認められ、主体的学習、課題学習、学び方学習などの「単元学習」が注目された。教材を開発編

成して綿密な計画の基に単元学習を展開した。また、音声表現で古典に親しませ、つけるべき能力を見据えた指導を行っている。論考エ・ク・サなどがそれである。論考サでは、音読・朗読、話し合い、座談会、発表、報告会、メモ・感想を入れ、グループ活動により、授業の活性化が図られ、読みを深める実践であった。論考オは、原文に傍注を付けたテキストを活用し、繰り返し音読することで意味を理解させて単元の目標を達成する手法であり、傍注テキストは大村はまの学習指導法に学んだものである。

III 平成元(一九八九)～九(一九九七)年

平成元年度版学習指導要領においては、「音声言語の指導を重視」したことにより、音読・朗読・群読による理解の深まりが見られた。多様な古典教育の追究の時期で、個性重視の社会意識や学習指導要領の「個性を生かす教育の充実」により、個の主体的学習を具体的に展開する実践が多い。論考ノ「仮想学習体験を取り入れた「おくのほそ道」では、単元名を「芭蕉とともに旅をしよう」とし、生徒の創意工夫を生かした学習活動を展開することを目指した。指導目標を、「仮想旅行を通して、場面の情景や芭蕉の心情を読み取り、作句することができる」「原文の持つリズムを生かし、音読に習熟することができる」「芭蕉の人間性に触れさせることにより、古典文学の楽しさを味わわせる」として、作句後、発表会を開き、単

元を振り返させている。

これらの実践は、学習者の意欲や関心を高め、言語活動の充実を図る授業実践であり、指導形態として、教科書教材を読んで、表現の特徴や作者松尾芭蕉の自然や人生に対するものの見方や感じ方を読み取りさせている。また、好きな場面を選んで、音読・朗読の発表をしたり好きな俳句を音読・朗読して鑑賞したりするなどの学習指導により、古典の表現の特徴やリズムを捉え、語感を磨くことをねらいとしていた。これら先行研究を踏まえ、本論においては、日常と古典の世界との接点を見つめるために、『おくのほそ道』を郷土と関連付けた古典の指導について実践することとした。

四 『街道をゆく』に想を得た「書き換え学習」の実践

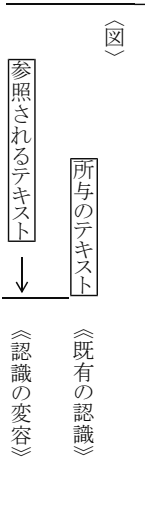
「おくのほそ道」の「平泉」では、芭蕉は元禄年間に平泉を訪れ、五百年前の源義経主従の最期や奥州藤原氏の滅亡に思いを馳せる。論者は、本論において、紀行文「おくのほそ道」の学習指導を計画する上で、司馬遼太郎の『街道をゆく』に想を得た。全四十三巻「街道をゆく」には、勤務校のある鹿児島県種子島のことについても書かれている『種子島みち』がある(注3)。司馬は、「街道はなるほど空間的存在ではあるが、しかしひるがえって考えれば、それは決定的に時間的存在であつて、私の乗っている車は、過去というほう大な時間の世界へ旅立っているのである」という。司馬の「時空の旅」を「おくのほそ道」と関連付けて、実証したいと考えた。そこで、「おくのほそ道」を踏まえたオリジナル「たねがしま道」を書くために、読むこと、書くこと、国語の知識をフル稼働させ、認識の方法を学ぶことができる「書き換え学習」は、学習指導として有効であると考えた。府川源一郎は「書き換え学習」を次のように定義付けている。

「書き換え学習」とは何なのか。簡単に言えば、一度書かれた文章を別の文体や別の立場からもう一度「書き換える」学習活動をする。こと、だといつていいだろう。

また、府川は、書き換えによる認識の変化を次のように述べる。

その文章を「書き換える」ということは、一度定着した「文字の連なり」文章である書き手の認識活動の軌跡を意図的に変更する作業である。書き換える対象として選んだ文章は、すでにひとまとまりのものとして定着しているから、それを崩したり、膨らませたりするには、変更する側にある程度の「力」が必要になる。文章の理解力や表現力はいうまでもないことだが、着想力、発想力、また連想力などの思考力を総動員して、その作業に当たらなければならぬ。普通、完成度の高い文章はしっかりとできたばかりになっているから、別の枠組みに「書き換える」ことは、そう簡単なことではない。

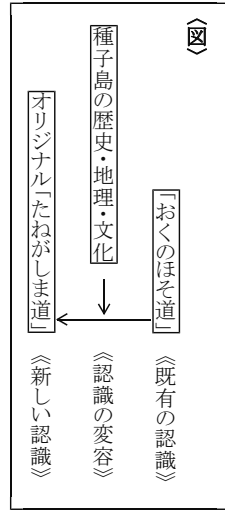
文章を書き換える上で、書き手はテキストを読み、思考の軌跡をたどり、内面の認識の理解に努める。「崩したり、膨らませたりするには、変更する側にある程度の「力」が必要になる。」「別の枠組みに「書き換える」とは、そう簡単なことではない。のように、「書き換え学習」は、単なる子供の言葉遊びではない。高木まさきは「書き換え学習」の構造として次の図を提示している。



← 産出されたテキスト

《新しい認識》

この図をもとに、本論の検証授業において、次のように措定した。



所与のテキストである「おくのほそ道」の俳文をもとに、「もし、松尾芭蕉が種子島を旅したとすれば、どこを訪れ、どのような俳文を書くか」を学習課題とした。種子島の歴史・地理・文化を丹念に調べまとめることが「認識の変容」につながり、「たねがしま道」の完成によって「新しい認識」へと促されることとなるのである。府川は、「書き換え学習」に働く認識諸能力を次の表で提示している。

ことばを 通しての 認識	対象認識	対象把握の力 課題提起の力	問題 追求の力
	自己認識	自己解放の力 自己相対の力	立場 確認の力
	関係認識	比較対照の力 状況把握の力 対象探求の力	差異 認識の力
ことばの 機能への 認識	文体意識の力 着想模倣の力	語彙選択の力 韻律感受の力	(メタ文章能力) 視点変換の力 論理構成の力 話者想定 の力 構造知覚 の力

本学習課題である、「松尾芭蕉が種子島を旅したとすれば、どこを訪れ、どのような俳文を書くか」は、「書き換え学習」認識諸能力表の、「問題追求の力」「立場確認の力」「比較対照の力」「状況把握の力」「差異認識の力」等に該当すると考えられよう。

五 指導の実際

『おくのほそ道』を郷土と関連付けた学習指導を行い、学習者の日常と古典の世界との接点を見つめる古典の指導について、指導計画を立てた。なお、研究の方向性は論者が提示し、指導の実際については、宮内悠子教諭(西之表市立種子島中学校)が令和五年十二月に実践したものである。

■実践のねらい

俳人松尾芭蕉の考えに触れ、古典『おくのほそ道』を日常に置き換え、古典を身近なものに感じさせる。

■身に付けさせたい資質・能力

「問題追求の力」・「立場確認の力」・「比較対照の力」・「状況把握の力」・「差異認識の力」

■実践の特色

「もし、松尾芭蕉が種子島を旅したとすれば、どこを訪れ、どのような俳文を書くか」を「書き換え」学習によって行う。

口語体俳文の書き方については、「おくのほそ道」を参考に、①細かい情景描写、②歴史的背景・逸話、③芭蕉の心情、④古人への思い、⑤俳句との関連の五つのポイントを意識させて取り組ませた。指導計画(全八時間扱い)及び指導案(7/8)は次のとおりである。

教科書教材については、第1時から第4時まで、「たねがしま道」を第5時から第8時まで実践

5 単元の指導計画(全8時間扱い) ※本時(7/8)

時	主な学習活動	指導・支援上の留意点	評価方法(○) 評価規準(☆)
1	1 学習目標を確認し、学習の見通しをもつ。 2 DVD「おくのほそ道」を鑑賞する。 3 表現やリズムを意識して、冒頭部分を音読し、対句的な表現がもつリズムを味わう。	1 学習の見通しをもたせる。 2 映像メディアを鑑賞し、作品の舞台を視覚的に捉えさせる。 3 文章の特徴やリズムに気を付けて音読させる。	○観察法、朗読 ☆ 作品のリズムや響きを楽しんで音読している。
2	1 冒頭部分を読み、芭蕉の旅に対する思いをまとめる。 2 歴史的背景などに注意して、作者のものの見方や考え方を捉える。	1 芭蕉の旅についての考えや旅立ちの気持ちを自分の言葉でまとめさせる。 2 現代語訳を参考にしてどのような情景かを想像させる。	○ノート、発表、点検法 ☆ 芭蕉の旅のあこがれや覚悟を読み取り、まとめている。
3 4	1 「平泉」を音読し、芭蕉の思いを想像する。 2 それぞれの句にこめられた作者の心情やものの見方について考える。 3 「立石寺」を音読し、情景を想像する。	1 「時の移るまで涙を落としはべりぬ」と書いた芭蕉の思いを考えさせ、自分の言葉でまとめさせる。 2 それぞれの俳句の中で使われている言葉を、俳文と関連付けながら、内容をとらえさせる。	○ノート、点検法 ☆ 作品の持つ表現の特徴を理解している。 ☆ 平泉での芭蕉の思いを読み取り、俳句に表された意味をまとめている。
5 6	1 松尾芭蕉が種子島にやってきましたしたら、どのような句を詠むか、想像して個人で俳文を書く。 ～「創作俳文『たねがしま道』を書こう～ ○ 種子島の景勝地 ○ 伝えたいこと(テーマ・主題) ○ 季節 ○ 切れ字 ○ 五・七・五の形に整える。	1 「俳句の世界」の既習内容を振り返り、俳文創作に取り組ませる。 2 俳文を提出する。	○ワークシート、点検法 ☆ 伝えたいことを明確にして、俳文を作成している。 ☆ 俳文の内容に合った俳句を作成している。
7 本時	1 「平泉」、「立石寺」の段を再度読む。 2 前時で作った俳文について、グループで交流して、意見を述べ合う。 3 グループ内でもらった意見を参考に表現を練り上げる。	1 「平泉」と「立石寺」の俳文を読み、芭蕉がどのような視点で書いているかを読み取る。 2 友達からもらったアドバイスをもとに、自分の俳文を見直し、改善点をワークシートにまとめる。	○ワークシート、点検法 ☆ 芭蕉が書いた俳文の特徴を読み取っている。 ☆ 意欲的に交流活動に取り組んでいる。
8	1 「たねがしま道」の清書を提出する。 2 これまでの学習を振り返り、古典の学習を通して身に付けたことをまとめる。	1 前時に考えた改善点を生かした清書を完成させ、提出する。 2 古典の学習を通して、学んだことを自分の言葉でまとめる。	○ワークシート、ノート 点検法 ☆ 3年間の古典の学習を振り返り、学んだことを自分の言葉でまとめている。

令和5年12月7日(木) 2校時
 西之表市立種子島中学校3年3組 36名
 授業者 宮内 悠子教諭
 単元(教材)名 古典に学ぶ「おくのほそ道」(三省堂)
 ※校内において、研究授業を実施した。

国語科学習指導案

8 本時の実際(7/8)

- (1) 本時の目標 ○松尾芭蕉が書いた俳文の特徴を捉えよう。
 ○作成した俳文を互いに読み合い、交流し、清書に向けて改善点を考えよう。
- (2) 展開

過程	主な学習活動	時間 形態	指導上の留意点 (☆は評価)
導入	1 前時までの学習内容を想起する。 2 本時の学習目標を設定する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 芭蕉が書いた俳文の特徴を捉えよう。 ・ 作成した俳文を互いに読み合い、交流し、清書に向けて改善点を考えよう。 </div>	5分 個	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの学習を振り返り、本時のねらいと見通しをもたせる。 ・ 導入で時間がかりすぎないように、標の提示と本時の流れは速やかに提示する。
展開	3 「平泉」「立石寺」の段を再度読み、俳文の特徴を捉える。 4 前時で作成した俳文を相互評価する。 5 友達からもらったアドバイスを参考にし、改善点を考える。	15分 個 ペア 15分 グループ 10分 個	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「平泉」(前半)「立石寺」では、どのような視点で俳文が書かれているか読み取る。 ・ 例文を示し、例文がどのような視点で書かれているか考える。 ・ 個人で考えた後、ペアで意見を交換する。(視点) <ul style="list-style-type: none"> ① 細かい情景描写(視覚・聴覚) 「秀衡が眺は〜功名一時の草むらとなる」 「岩に巖を重ねて〜岩上の院々扉を閉ぢて」 「物の音聞こえず」 ② 歴史的背景、歴史エピソード 「三代の学耀一睡のうちにして」 「さても義臣すぐつてこの城にこもり」 ③ 芭蕉の心情 「時の移るまで涙を落としはべりぬ」 「心澄みゆくのみおぼゆ」 ④ 古人への思い 「さても義臣すぐつてこの城にこもり」 ⑤ 俳句との関連 ・ 友達の前時を読み、視点が書かれている箇所印をつけさせる。 ・ アドバイスをワークシートに記入させる。 ・ 友達からもらったアドバイスをもとに、自分の俳文を見直し、改善点をワークシートにまとめる。
終末	6 本時のまとめをする。 7 次時の予告をする。	5分 個	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の学習内容を振り返らせる。 ☆ 芭蕉が書いた俳文の特徴を読み取ることができたか。 ☆ 意欲的に交流活動に取り組むことができたか。 ・ 次時は「たねがしま道」の清書することを確認し、学習への意欲をもたせる。

六 俳文の考察

教科書教材を四時間扱ったのち、口語体俳文「たねがしま道」の「書き換え学習」に入った。第五時以降の指導の流れを以下に示す。
【第五・六時】

ワークシートを活用して、松尾芭蕉が種子島にやつてきたとしたら、どのような句を詠むか、想像して俳文を書かせた。その際、芭蕉の書き方の特徴として、①視覚や聴覚などの細かい情景描写（秀衡が跡はく功名一時の草むらとなる）「物の音聞こえず」、②歴史的背景・逸話（二代の栄耀一睡のうちにして）「さても義臣すくべつこの城に」もあり）、③芭蕉の心情（時の移るまで涙を落とすはべりぬ）「心澄みゆくのみおぼゆ」、④古人への思い、⑤地の文と俳句との関連、の五つのポイントを意識して俳文に生かすよう指導した。

【第七時】

第五・六時で書き上げた原稿には、五つのポイントが生かされているか、グループ内で交流しながら、表現を練り上げ、よりよい俳文にするためのアドバイスを行う言語活動を行った。終末は、グループのメンバーからのアドバイスを受けて、「清書（向けての改善点）」を書かせ、自分自身を振り返らせ、メタ認知化を図った。

【第八時】

前時の学習内容を踏まえて、学習者に清書を書かせた。ここでは学習者三名の俳文を取り上げ、五つのポイントについて考察する。

宝満神社

周りに勧められて来た種子島で最も古い歴史を持つ神社は、玉依姫命を祀る宝満神社である。行ってみると、緑に囲まれていて拝殿の周りには大蘇鉄には迫力があつた。参拝をしに来た島民に話を聞くと、玉依姫命は米の原種、赤米

を持ってこの地に降臨したため、宝満神社は日本の稲作始まりの地と呼ばれているという。騒がしい声を迎っていくと、周辺四キロメートルを超える広さの宝満の池が現れた。池の周りには大勢の水鳥が飛来していて、美しい鳴き声に心が癒された。春には近くの田んぼでお田植え祭が行われるそうだ。稲作の大切な行事、ぜひとも一度は見たいものだ。

水鳥や池に集いて日向ぼこ

(Y)

五つのポイントに関する記述に傍線を付した。

宝満神社

周りに勧められて来た種子島で最も古い歴史を持つ神社は、玉依姫命を祀る宝満神社である。行ってみると、③緑に囲まれていて拝殿の周りには大蘇鉄には迫力があつた。参拝をしに来た島民に話を聞くと、②玉依姫命は米の原種、赤米を持ってこの地に降臨したため、宝満神社は日本の稲作始まりの地と呼ばれているという。①騒がしい声を迎っていくと、周辺四キロメートルを超える広さの宝満の池が現れた。池の周りには大勢の⑤水鳥が飛来していて、①美しい鳴き声に③心が癒された。春には近くの田んぼでお田植え祭が行われるそうだ。③稲作の大切な行事、ぜひとも一度は見たいものだ。

水鳥や池に集いて日向ぼこ

(Y)

宝満神社は、種子島宇宙センターからロケットを打ち上げる際に職員が打ち上げ成功を祈願する神社であり、パワースポットと言われている。交流活動において、心情や視覚・聴覚に関する記述をもっと書いたほうがよいと学習者Yはアドバイスされ、表現を

工夫した。①周囲四kmの池、水鳥の鳴き声など、視覚や聴覚を表現し、②赤米と玉依姫命伝説、日本の稲作始まりの逸話を述べ、⑤池に凝集している水鳥に対する感動をモチーフにして俳句を作った。季語「日向ぼこ」のセンスも光る。

門倉岬

島間の港から種子島に降り立って四里ほど徒歩で門倉岬へ行った。天候に恵まれ、海はきらきらと輝き、潮の香りがした。波の心地良い音を聞きながら私は昔のことに思いを馳せた。天文十二年、八月二十五日、台風の影響を受けた南蛮船が門倉岬に漂着し、当主の種子島時堯が鉄砲二挺を買ったそう。時堯は地元の刀鍛冶に鉄砲作りを命じた。刀鍛冶らは悪戦苦闘しながら誰も知らない武器の国産化に成功した。未知の物を取り入れ、国産化に挑んだ彼らの執念があったからこそ、この国は大きな変化をもたらしたのだろう。

(A)

門倉岬

島間の港から種子島に降り立って四里ほど徒歩で門倉岬へ行った。①⑤天候に恵まれ、海はきらきらと輝き、潮の香りがした。③波の心地良い音を聞きながら私は昔のことに思いを馳せた。②天文十二年、八月二十五日、台風の影響を受けた南蛮船が門倉岬に漂着し、当主の種子島時堯が鉄砲二挺を買ったそう。時堯は地元の刀鍛冶に鉄砲作りを命じた。刀鍛冶らは悪戦苦闘しながら誰も知らない武器の国産化に成功した。③④未知の物を取り入れ、国産化に挑んだ彼らの執念があったからこそ、この国は大きな変化をもたらしたのら

う。

渚にて歴史の薫る夏の潮

(A)

一五四三(天文十二年)、ポルトガル船が種子島に漂着し、火縄銃が日本に伝わった。薩摩藩はその技術を学び、増産を可能にした。学習者Aは、交流活動において、歴史的背景についての記述を評価された一方、情景描写を増やしたほうがよいとアドバイスされている。①視覚・嗅覚を海の美しさ、潮の香りで述べ、②鉄砲伝来の逸話をもとに、③当時のことに思いを馳せ、「渚にて歴史の薫る」と俳句にしたが、「潮の香る」と掛けて表現しており見事である。

雄龍・雌龍の岩

種子島の海沿いに、雄龍・雌龍の岩という二つの岩がある。この岩にはある逸話が残されている。昔、崖の上に達五郎と達江という仲の良い働き者の夫婦が住んでいた。ある嵐の夜、二人は崖崩れに遭い、海に投げ出されてしまった。二人は行方知れず、数か月が経った頃、突然二つの巨岩が仲良く寄り添うように立っていた。島民は二人の生まれ変わりであるとして、雄龍岩・雌龍岩と呼ぶようになったという。二つの岩は夫婦岩として、しめ縄で結ばれ、仲良く寄り添っている。さっと今も島を見守ってくれているのだろう。岩の間に沈む冬の夕日は水面に反射し、見る者を心穏やかにしてくれるまさに圧巻の景色である。

(S)

雄龍・雌龍の岩

種子島の海沿いに、雄龍・雌龍の岩という二つの岩がある。

この岩にはある逸話が残されている。②昔、崖の上に達五郎と達江という仲の良い働き者の夫婦が住んでいた。ある嵐の夜、二人は崖崩れに遭い、海に投げ出されてしまった。二人は行方知れず、数か月が経った頃、突然二つの巨岩が仲良く寄り添うように立っていた。島民は二人の生まれ変わりでであるとして、雄龍岩・雌龍岩と呼ぶようになったという。①④二つの岩は夫婦岩として、しめ縄で結ばれ、仲良く寄り添っている。③きつと今も島を見守ってくれているのだらう。①⑤岩の間に沈む冬の夕日は水面に反射し、見る者を心穏やかにうつくれるまさに圧巻の景色である。

(S)

学習者Sは冒頭、地域に残る②「雄龍・雌龍の岩」伝説をモチーフにして俳文を完成させた。雄龍・雌龍の岩を見て、①④夫婦岩がしめ縄で結ばれ、仲良く寄り添っていることを書き、③「きつと今も島を見守ってくれているのだらう」、「岩の間に沈む冬の夕日は水面に反射し、見る者を心穏やかにしてくれるまさに圧巻の景色である」と感慨にふける。また、特筆すべきは、⑤冬の夕日から、季語「冬茜」を用いて、「切れ字「けり」で結び、古典の学習を意識していることも見逃せない。

七 「時空の旅」を学習活動中に実感できた学習者

本論では、「おくのほそ道」において、郷土と関連付けた学習指導を行い、郷土や国で育まれてきた優れた伝統と文化などのよさに気付かせ、学習者の日常と古典の世界との接点を見つける古典の指導を論じた。渡辺春美による、「おくのほそ道」の実践研究史を先行研究として、実践家たちの学習主題や指導方法について概観

した。「おくのほそ道」は「価値が高く、国民の教養として知っておくべき教材」として採録され、「中学生「生き方への一提言」という意味合いを持たせ、今を生きる生徒達の問題提起としている」との中嶋の論から、改めて古典学習の意義を再認識できた。

本論においては、紀行文「おくのほそ道」の学習指導を計画する上で、司馬遼太郎の『街道をゆく』に想を得、方法論として、「おくのほそ道」を踏まえたオリジナル「たねがしま道」を書くために、読むこと、書くこと、国語の知識をフル稼働させ、認識の方法を学ぶことのできる「書き換え学習」は有効であると考えた。府川源一郎や高木まさきによる「書き換え学習」の手法を用いて、松尾芭蕉が種子島にやってきたとしたら、どのような句を詠むか、想像して口語体の俳文を書かせた。その際、芭蕉の書き方の特徴として、①視覚や聴覚などの細かい情景描写、②歴史的背景・逸話、③芭蕉の心情④古人への思い、⑤地の文と俳句との関連、の五つのポイントを意識して俳文に生かすよう指導した。

学習者は、種子島に関する事物をモチーフに、交流活動を通じて表現を練り上げ、俳文「たねがしま道」を完成させた。芭蕉というフィルターを通して、学習者は古代・中世・近世と「時空の旅」(司馬)を学習活動中に実感できたのである。次は学習後の感想である。

■ 初めは難しそうだなと思っていたが、書き始めると思っていたよりも書くことができ、面白かった。自分の知らない種子島のエピソードを知ることができて良かった。芭蕉になったつもりで俳文を書いたことで、この景色をどのように表現するか、どんな順序で書くかなどを考え、芭蕉の考え方やものの見方、生き方について深く理解することができたと思う。

■ その土地を歴史とうまく絡めながら書くことは難しかったが、芭蕉の俳文を分析して、それを自分の俳文に生かしていくことが面白く感じた。また、交流活動で俳文を読み合い、アドバイスを

もらって、自分の俳文には何が足りないかが明確になった。本実践を通して、読むこと、書くこと、国語の知識をフル稼働させ、認識の方法を学ぶことのできる「書き換え学習」は大変有効であることが立証できた。今後も郷土をモチーフに学習者の日常と古典の世界との接点を見つめる古典の指導の一般化を図っていきたい。

(注)

- 1 松尾芭蕉自身が「おくのほそ道」と記していることから、本論においては、「おくのほそ道」としたが、各教科書や各研究者の論考の表記については、そのままとした。
- 2 川本信幹は、「おくのほそ道」の旅の目的について、麻生磯次の論から、①漂泊の思い、②未知の自然へのあこがれ、③古人の心を求める、④風雅の実体をつかむ、⑤新風の普及、を挙げている。
- 3 司馬遼太郎が種子島を訪れたのは、一九七五昭和五十年九月二十八日から三十日のことである。書名は、『街道をゆく八熊野・古座街道、種子島みちほか』である。本論においては、書名との混同を避け、「たねがしま道」を「おくのほそ道」と揃えた。

(参考文献)

- ・石塚修『おくのほそ道』の教材的価値について―中学生に対して何を教えてゆくべきか―、『人文科教育研究』一九、一九九二年
- ・大岡信『あなたに語る日本文学史』、角川文庫、二〇二三年
- ・川本信幹編『心を揺るがす楽しい授業 話題源国語 下巻』、東京法令、一九八六年
- ・司馬遼太郎『街道をゆく八熊野・古座街道、種子島みちほか』、朝日文庫、二〇〇八年
- ・週刊朝日編集部『司馬遼太郎の街道Ⅰ』、朝日新聞出版、二〇二〇年

・菅野宏「読み方の諸問題と小主題―『おくのほそ道』の場合―」、『福島大学教育学部論集 人文科学』二六、一九七四年

・高木展郎・三浦修一監修『こぼが育つ学びのプラン』、三省堂、二〇〇三年

・瀧内 洋「芭蕉の旅の意義と旅行テーマとしての可能性の考察」、『総合観光研究』第五号、二〇〇六年

・中嶋真弓「芭蕉『おくのほそ道』における教材価値の研究―中学校・高等学校の比較を通して」、『国語科教育』四六、一九九九年

・府川源一郎・高木まさき編『認識力を育てる「書き換え学習」中学校・高校編』、東洋館出版社、二〇〇四年

・町守守弘・幸田国広・山下直・高山美佐・浅田孝紀編『シリーズ国語授業づくり 高等学校国語科 新科目編成とこれからの授業づくり』、東洋館出版社、二〇一八年

・宮内征人「古典に親しみ、伝え合う力を高める授業の創造―郷土のよさを生かした古典の指導を通して―」、『国語教育』第五五号、鹿児島県中学校教育研究会国語部会、二〇〇一年

・宮内征人「北播磨の時代的・文化的背景と関連付ける古典の指導―『平家物語』三草合戦の場面を読む―」、『解釈』六六六集、二〇一二年

・宮内征人「郷土や地域に着目した古典の指導―『島津いろは歌』を例に―」、『言語表現研究』第三十三号、二〇一七年

・渡辺春美「戦後古典教育実践史の研究―奥の細道』の学習指導の場合―」、『全国大学国語教育学会国語科教育研究』大会研究発表要旨集、二〇〇二年

・渡辺春美『戦後における中学校古典学習指導の考究』、溪水社、二〇〇七年

(みやうちゆきと／中種子町立中種子中学校)